

第5章．まとめ

5 - 1 本調査を受けて

「歩いて楽しむ観光」については、特に歴史都市と呼ばれる都市において、それぞれの都市の魅力をより実感してもらうために重要な施策となっている。その一方で、町家等古い街並みの保存や活用、観光案内情報の効果的な提供といった「歩いて楽しむ観光」のインフラが十分整備できていないのが現状である。

こうしたことから、本調査では、まちなかを歩いて楽しむという歴史都市の魅力を向上するため、町家の保存活用、観光案内所・案内標識の設置検討、観光客のニーズ調査等を総合的に実施した。

町家の観光分野での利用のうち、宿泊施設は、多様な観光ニーズに合致し、京都への宿泊観光の促進を図る上での効果も期待されるなど、最も重要な役割を果たすものの一つと考えられる。しかしながら、都心部における町家の滅失が進んでいる上、改修等による宿泊施設への転用には課題も多く、町家を活用した宿泊施設が一気に拡大するのは容易ではない。このため、今後は各事業者の取組や様々な実験事業などを参考にしつつ、行政の各部署など関係者が連携し、京都らしい景観の保全と観光利用促進の両面から、より有効な町家の保全・活用方策について、協議していくことが求められている。

また、観光案内情報の効果的な提供を行うためには、観光案内所や案内標識等をそれぞれ単独のものとして検討するのではなく、総合的な検討を行い、地域全体で継続的な取組を進めていく必要がある。

金閣寺周辺で実施した「まちなか観光案内所」の実験では、観光客が案内所で必要としているものは、主にその場所の周辺の情報であり、情報ツールとしてエリアのマップが多いことが確認された。今後は、対応するスタッフのスキルアップやマップの充実を図るとともに、案内標識やホームページなど他の媒体との連携等も進め、継続的に案内提供の高度化に取り組んでいくことが求められている。

東山地域では、今回の検討結果を踏まえ、地域が主体となって観光案内提供に関わるガイドラインを作成し、継続的な運用を行っていくこととしている。そこでは、単に観光案内図板等の設置基準や表記方法を示すのみならず、民間が設置する場合のインセンティブのあり方、地域が主体となった維持管理のシステム作り、更には観光案内図板等を補完する「人」による案内などについて、包括的に検討される予定である。

また、宇治市においても、初めての来訪者からリピーターまで、多様なニーズに応じた観光案内の提供が求められている。そのためには、行政や観光協会のみならず、商店会など地元の各団体・個人が参画し、施策の検討と実行を行う場づくりが必要である。そして、多様な主体が連携した組織を中心に、歩いて楽しむ観光客の目線に立ち、より充実した観光案内の提供にむけて、継続して取組が進められることが期待されている。

5 - 2 他地域への波及

町家等古い街並みの保存や活用は、歴史都市に共通する課題となっている。その中で、日本中で最も町家が集積している京都において、町家活用のベストプラクティスを調査することで、他の歴史都市に残存する町家を活用する際の参考になると考えられる。

また、まちなか観光案内所を稼働させている都市もいくつか存在するが、観光客のニーズに合致せず活発な利用には至っていないケースが多い。金閣寺エリアでまちなか観光案内所の効果的な運用方策を検討することで、全国のまちなか観光案内所の有効活用に向け、課題を投げかけることとなる。

東山地区における観光案内板ネットワーク化に関する検討は、行政だけでなく鉄道会社や飲料会社等民間事業者と連携して案内板を設置することで、設置やメンテナンスのコスト負担軽減、地域が主体となった運用管理の仕組みなど、全国に先駆けた模範事例となると考えられる。

宇治市での取組は、アンケート調査による観光客ニーズ把握を踏まえ、観光客が求める観光情報の提供内容や方法について、それに特化した地元の協議会組織を形成し、総合的な検討・運用を進めていこうというものである。この協議会を中心とした取組も、他地域の参考になると考えられる。

以上のように、今回の調査で、京都・宇治のまちなかにおける観光情報の効率的な提供等が検討された。京都・宇治周辺地域は、日本全国及び世界中から非常に多くの観光客が来訪しており、この地域での情報提供に関わる取組は、自ずと他地域に伝搬するものとなる。このため、他地域においても、京都・宇治での取組を参考に、各地に応じた取組により、「歩いて楽しむ観光」が推進されることが期待されるところである。